

# 今の子どもたちへ

多く盛り込まれています



## 祖父母や両親から聞いて 木暮安太郎さん（駒形町・95歳）

明治四十四年農家に生まれ、小さいころから祖父母や両親からたくさんのお話を、民話を聞きながら育ちました。特に、父親は話し好きで、こ

たつ中でお茶を飲みながら、また、夜なべ仕事の最中などに話してくれたことを今も思い出します。父は家で採れた農産物をたき木と交換するため、赤城南るくの集落へもよく出掛けたので、あちこちに伝わる珍しい話などを聞いて来て、教えてくれたのです。わたしも農業のかたわら、県内各地の民話を集め、記録しておいたのですが、老人会に入ってから、地域の子どもたちにいるいろいろな話を聞かせて、一緒に楽しんでいるんです。

子どものころには、寒い冬の日、こたつに当たりながら、おじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんから昔話・民話を聞いたり、本で読んでもらったりした経験が誰にもあるのではないのでしょうか。そこで今回は郷土に伝わる楽しい話をたくさん知っている、駒形町の本暮安太郎さん（95歳）にいろいろと聞きました。ここでは次の四つの楽しい昔話、民話を紙面で紹介しましょう。皆さんも家族団らんの中で、子どもたちに読んで聞かせてみませんか（担当は市民編集委員・大沢、中島）。

問い合わせは市政発信課 890 6642へ。

# 郷土に伝わる昔話や民話を

楽しくてためになる教訓や戒めなどが

## 拾い物配分

昔、ハチとアリが仲良く住んでいた。春先になって、二人が散歩に出ると、魚のにおいがしてきた。草むらにニシンが一本落ちていた。それを拾って、先へ行った。今度はタイが落ちていた。二人はどうして分けたいか迷っていた。見ると、近くに魚屋さんがあった。「どうして分けたいんだべか」「魚屋さんしばらく考えていた。「ああ、そうだ。ニシンはハチが取っておきな。タイはアリが取っておきな」ハチとアリが

## 観音様の相撲

ある村にいくらかの金な男がいた。正直もんで、一生懸命働いていた。ある日、田んぼからの帰りに木像の観音様を拾った。この人は、うちへ帰ってきてから朝に晩に観音様を拜んでいた。この話を村一番の大尽（お金持ちのこと）が聞いていた。「うちの観音様と相撲をさせてみよう」と言った。それで、大尽の金の観音様とこの人の木の観音様と相撲を



## キツネ退治

昔、あるお寺に和尚さんと小僧さんがいた。和尚さんは檀家へ供養に行くといろいろの物をもらってくる。しかし、帰りにもらった物をみんなキツネに巻き上げられてしまつた。小僧さんはそれが悔しくってたまらない。何とかキツネをこらしめてくれべえと思つていたら、ところがキツネも利口。やつつけることができない。あるとき、和尚さんが山向この村へ供養に出掛けた。小僧さんは「今日はキツネのやつをやつつけてやる」と、袋の中に油揚げなどを入れて出掛けた。キツネはいつものとおり待っていた。小僧さんが来たので、和尚さんに化けて、小僧さんのところへ寄つて来た。「こ苦労」と言った。「おまえ、早く来たな」二人は話しながら帰つて来た。「和尚さん、弁当をこしらえてきました」「じゃ、その弁当を出しなさい」小僧さんは袋の口を広げた。すると、キツネの和尚さんが袋の中に入った。袋の中でキツネの和尚が「どつしてはれたか」小僧さんはこつこつと言った。「わたしがちょうちんをつけて来たら影が映つた。それがキツネの影だった。それで分かった」



## まんじゅうを初めて見た人の話

昔のころで、一般の人はまんじゅうなど食べられなかったころのお話。ある日、殿様が農村を見て歩いていたら、そのとき、農民にまんじゅうを見せて、「これをおまえたちにやると言ってくれたらだつて。それなら、まんじゅうをもらつた者が何だか知らない。「これは何だ」と、まんじゅうを割つてみた。中からあずきが出た。「これはあずきを食つ虫」と言つて、村中して、まんじゅうを退治したといつた。

とることになった。

「金の観音様が負ければ、わしの身上（財産）をおまえにやる。木の観音様が負ければ、おまえは作番頭でわしのところにただ奉公をしなさい」ところが、相撲をしたら、金の観音様が負けてしまった。しょうがねえ、大尽さんは身上をその人に渡して、村を出ることになった。金の観音様を背負つて出た。大尽さんはつぶやいた。「どつして負けたんか」背中の観音様が言った。「俺は一年に一回しか食べられなかった。むこうは毎日三度二度ご飯を食べてもらっていたからだ」